

みえ生と死を考える市民の会 映画上映会 & おしゃべり会

# 映画「終わりよければすべてよし」を 観て自分について考えよう！

日 時 平成19年10月6日(土)

第1回上映 10:00~12:10 (9時45分 開場)

第2回上映 13:00~15:10

おしゃべり会 15:30~16:30

\* 第2回上映終了後、15時半頃より“おしゃべり会”を計画しています。

映画を観て考えたこと、疑問が残ったことなどを一緒に話してみませんか？

“おしゃべり会”には、在宅医療、緩和ケアを専門とする医療者も参加していますので、  
情報提供や相談等にもお応えしたいと思っています。



場 所 三重県総合文化センター 小ホール  
費 用 前売り券 700円 当日券 1000円

映画「終りよければすべてよし」は、終末期医療の在り方はどうあるべきかをテーマにした映画であり、日本を代表する記録映画作家・羽田澄子氏が監督しています。6~7月には東京・岩波ホールで上映され大きな反響がありましたが、地方では上映されないため残念に思っていました。

今回、勇美記念財団からの助成金をいただき、岩波ホールの半額で映画上映会を企画できました。なるべくたくさんの方にご覧になっていただきたいので、上映会は2回にしました。また、映画を観て終わるだけでなく、自分や家族の「最期の過ごし方」についても考える機会としたいと思い、第2回上映後には、“おしゃべり会”も企画しています。映画を観ると、三重県では…？自分の地域では…？と疑問もわいてくると思いますので、医療者も参加し一緒に考えていきたいと思っています。

**<前売り券取り扱い窓口> お近くの窓口でお買い求めください**

三重県総合文化センターチケットカウンター TEL059-233-1111(代表)

ワニコ書店(三重大附属病院前) TEL059-231-3000

三重大学医学部附属病院医療福祉支援センター TEL059-232-1111 (入退院玄関よりすぐ)

三重大学医学部看護学科事務室 TEL059-231-5086 (医学部レーンより真直ぐ進入)

ベタニヤ内科(津市高野尾町) TEL059-230-7373

複合型介護施設群「しおりの里」津市野田 TEL059-239-1313

介護老人保健施設「万葉の里」津市一志大字高野 TEL059-295-1600

介護老人福祉施設「泉園」津市野田(泉ヶ丘団地内) TEL059-237-2526

介護老人保健施設「なごみの里」多気郡勢和村 TEL0598-49-8858

グループホーム「八幡園」津市津興 TEL059-213-7538

種田商店 津市高茶屋(F1マート近く) TEL059-234-3238

三重聖十字病院(三重郡菰野町)事務受付 TEL059-391-0123

四日市看護医療大学(庶務課:担当 三宅) TEL059-340-0700

坂倉ペインクリニック(白子駅東口) TEL059-386-0007

坂倉ペインクリニック在宅診療所(鈴鹿市伊船町) TEL059-371-6400

三重ハートセンター(明和町大淀) 担当:中村 TEL0596-55-8188

三重県立志摩病院 看護部 TEL0599-43-0501

いせ在宅医療クリニック(伊勢市御園町) TEL0596-20-8104

岡波総合病院(伊賀市上野桑町)受付 TEL0595-21-3135

連絡先

〒514-8507 津市江戸橋 2-174

三重大学医学部看護学科内

みえ生と死を考える市民の会事務局

Tel & Fax 059-231-5091

mayumi.t@nurse.medic.mie-u.ac.jp

## 市民公開講座

映画「終りよければすべてよし」を観て自分について考えようを企画して

三重大学医学部看護学科 辻川真弓

### はじめに

「生病老死」は自然な出来事であるが、人々は日常的にはそれを考えようとはしない。そこで「みえ生と死を考える市民の会」では、あえて「生きること」「死ぬこと」について皆で考える機会をつくろうと活動を続けており、その活動は本年度で結成 10 年を迎える。今回の公開講座では、一般市民が「どのような最期を迎えたいか」を考えるために映画上映会とワークショップをおこなったので、その効果を報告する。

### 方法

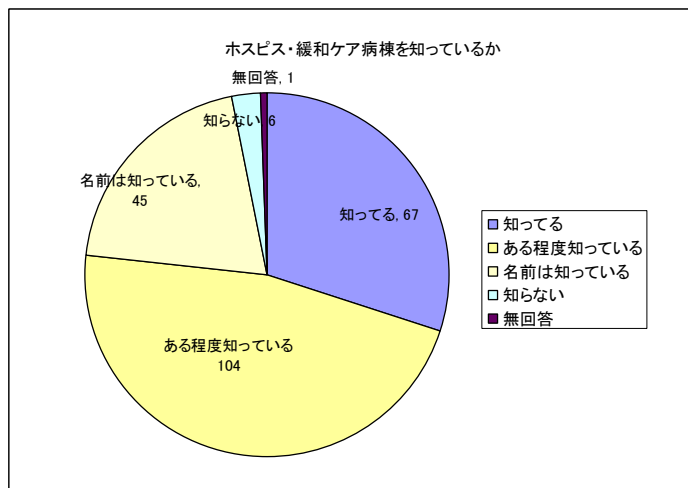
一般市民 270 名を対象に、終末期医療をテーマにした「終りよければすべてよし」（羽田澄子監督）上映会を企画した。この映画では、終末期医療の在り方について、特に「在宅医療」とはどうあるべきなのかを、日本・オーストラリア・スウェーデンの、それぞれ先進的な「現場」を訪ねることによって、日本における在宅医療はどうあるべきかを問いかけている。映画を観た人は、自分や家族の最期について考えることとなり、様々な疑問が生じることが期待される。そのため、映画終了後に、三重県内で活躍する在宅医療、緩和ケアを専門とする医療者が促進役となって、参加した市民の疑問に応えられるようなワークショップも併せて開催した。これらのねらいを示した上で、一般市民が多数参加できるよう、広く参加を募った。

一方、自分や大切な家族の最期の過ごし方についての考え方が、映画を観たことによりどのように変化したかを捉えるために、質問紙調査を行った。質問内容は、自分や大切な家族が末期がんになった場合、最期をどのように過ごしたいかを問うものである。映画を観る前後で同じ質問をおこない、その変化を比較した。統計検討は、SPSS ver. 15.0 を用いて、Wilcoxon の符号順位検定によりおこなった。有意性の判定は 5% 以下とした。調査対象者への倫理的配慮として、調査の趣旨を口頭および紙面で説明した上で、無記名式調査として実施した。

### 結果と考察

#### 参加者の背景

調査協力者は 223 名（男性 36 名、女性 187 名）であり、年代別にみると、60 代（75 名 33.6%）50 代（52 名 23.3%）40 代（34 名 15.2%）の順であった。このことから、参加者の多くの人々が女性であり、自分の老後について真剣に考える、比較的年齢の高い世代であったことがわかる。



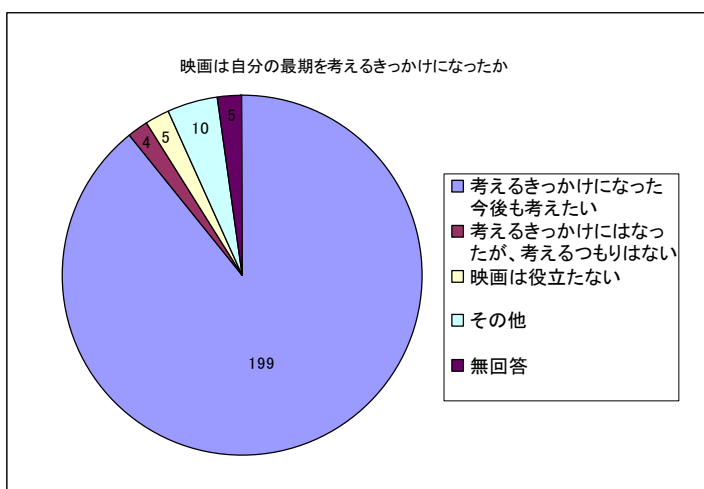
## ホスピス・緩和ケア病棟を知っていますか

「ホスピス・緩和ケア病棟を知っていますか」という質問には、「知っている」が67名(30.0%)、「ある程度知っている」が104名(46.6%)であり、これらを合わせると、76.6%となることから、ホスピスや緩和ケア病棟についても、多くの人を知るようになったという近年の変化を感じます。これは、日本ホスピス緩和ケア振興財団がおこなった調査<sup>1)</sup>の、女性では65.5%が「よく知っている」「ある程度は知っている」と回答しているという結果に比べ若干高い値となった。

1) 日本ホスピス緩和ケア振興財団：ホスピス・緩和ケアに関する意識調査より

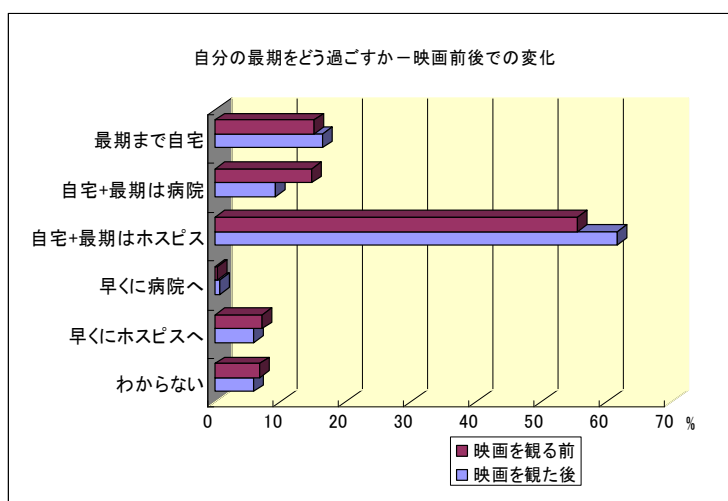
## 映画は自分や家族の最期を考えるきっかけになったか

199名(89.2%)の人が「映画は自分や家族の最期を考えるきっかけになり、今後も考えたい」と答えており、「映画は役立たない」は5名(2.2%)、「考えるきっかけにはなったが、考えるつもりはない」は4名(1.8%)であった。したがって、映画を観たほとんどの人は、映画は自分や家族の最期を考えるきっかけとなったと答えており、今後も考えたいと答えていることになる。映画があまり役に立たなかったと答えた人は約5%であった。その理由として、映画自体が海外の在宅ケアの状況を示すことが多かったため、我が国の状況、それも自分の地域ではどうなのかということに繋がらなかったことが一因と考えられる。



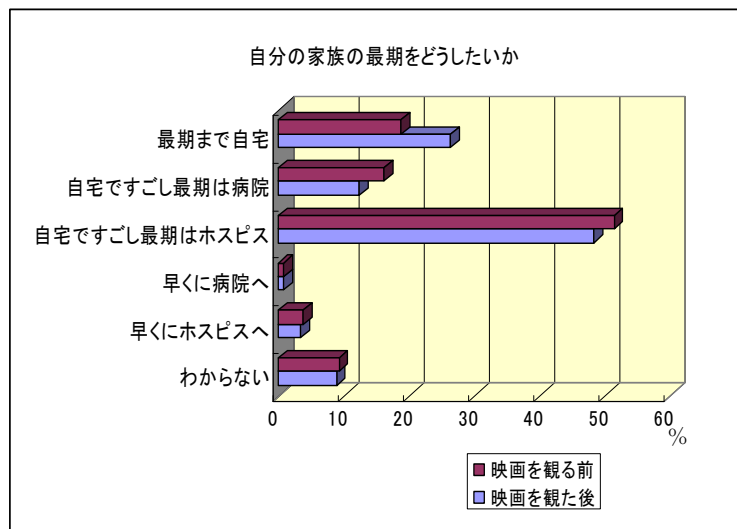
## 自分の最期をどう過ごしたいか

「もしあなたが末期のがんにかかり、余命が限られているとしたら、どのような療養生活を送りたいですか」という質問について、映画を観る前後で比較した。その結果、最も多い回答は「自宅で療養し必要になればホスピス・緩和ケア病棟に入院したい」であった。これらの傾向は、映画の前後で有意な変化を認めなかった。



### 家族には最期をどうしてあげたいか

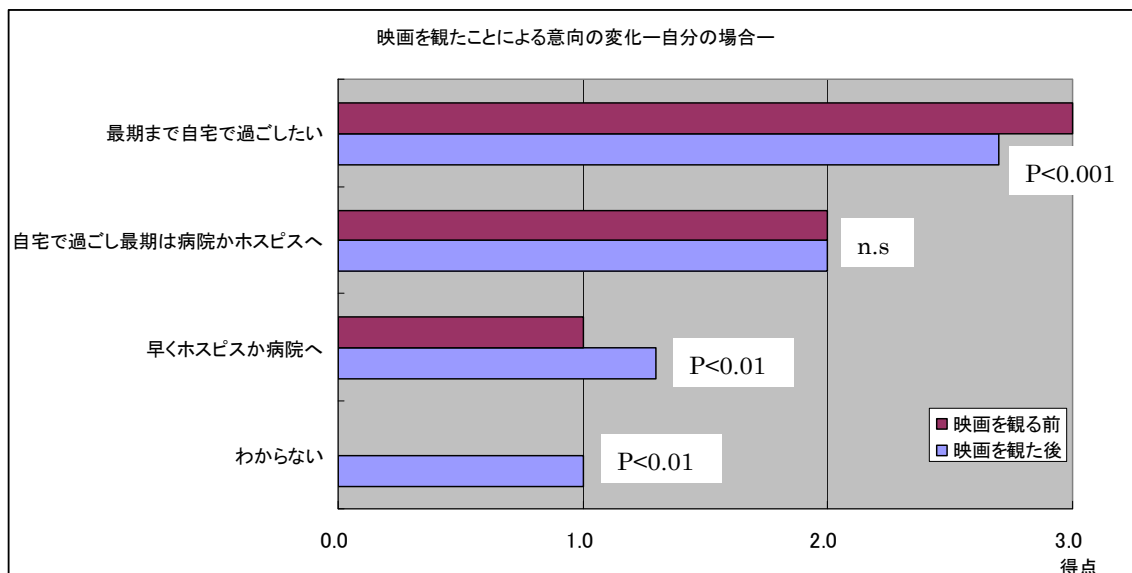
「もしあなたのご家族が末期のがんにかかり、余命が限られているとしたら、どのような療養生活をさせたいと思いますか」という質問について、映画を観る前後で比較した。その結果も、最も多い回答は「自宅で療養し必要になればホスピス・緩和ケア病棟に入院したい」であり、映画の前後で有意な変化を認めなかった。以上のことから、終末期の過ごし方については、在宅医療を基本としながらも、いざとなった時には、ホスピス・緩和ケア病棟で過ごすことを希望される方が多いことがわかった。

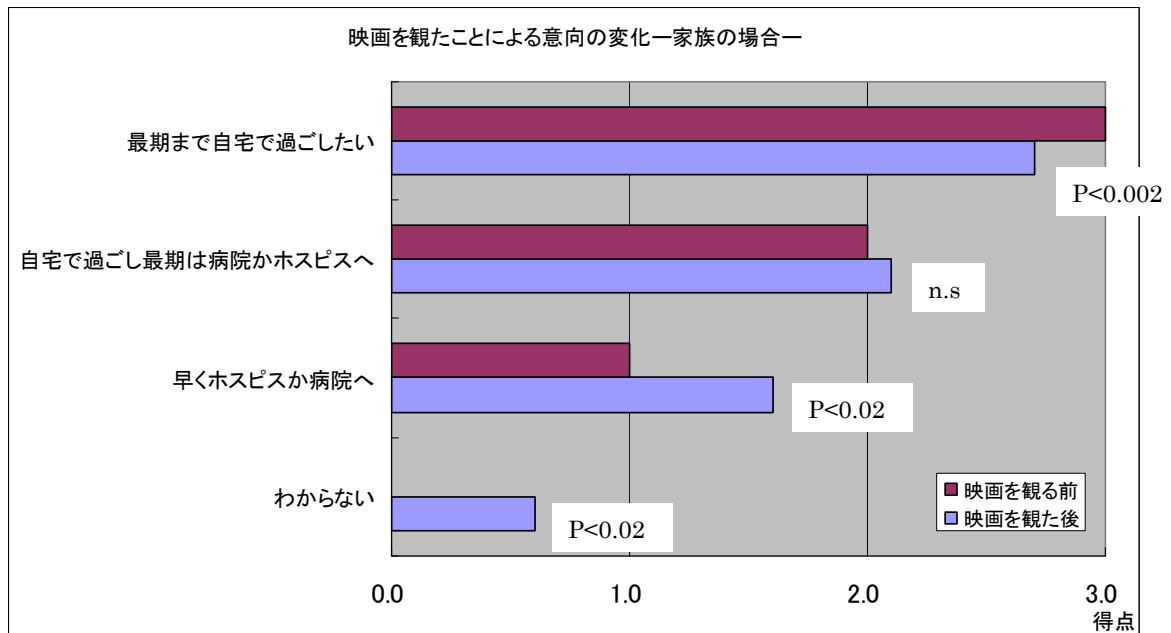


### 映画を観たことによる変化

以上のように、映画を観た影響は全体的な傾向としては、認められなかった。しかしながら、映画を観る前には「最期まで自宅で過ごしたい」と思っていた方が、映画を観てからどのような気持ちになっているかを捉えたいと考えた。そこで、映画を観る前に「最期まで自宅で過ごしたいと思う」は3点、「自宅で過ごし最期は病院かホスピスに行きたいと思う」は2点、「早くに病院かホスピスに行きたい」を1点、「わからない」を0点とスコア化した。その上で、それらの人々が映画を観た後に、どのような意向に変化したかをスコアとして表示し、Wilcoxonの符号順位検定により検討した。

その結果、自分の最期についての場合も、また家族の最期についての場合も共通した傾向を認めた。すなわち、「最期まで在宅で過ごしたいと思っていた人」は、最期には病院やホスピスも利用することを取り入れる意向に、また、「早期に病院やホスピスを利用したいと考えていた人」は、在宅で過ごすことを考えるようになっていた。また、「自宅で過ごし、最期はホスピスや病院を最





期には利用したいという人」は、映画を観てもその意向に変化を認めなかった。一方、映画を観る前には「わからない」と答えていた人は、具体的にどうしたいかを考えるような変化を認めた（いずれも  $p < 0.001 \sim 0.02$ ）。

## 結論

一般市民 270 名を対象に、終末期医療をテーマにした「終りよければすべてよし」（羽田澄子監督）上映会を企画した。また、映画を観る前後で、自分や大切な家族が末期がんになった場合、最期をどのように過ごしたいかについて質問紙調査を行った。

その結果、約半数の人が「自宅で過ごし、最期はホスピスや病院を最期には利用したい」と考え、その傾向は映画の前後で変わらなかった。映画は参加者に自分や家族の最期の過ごし方について具体的に考えるような変化をもたらした。